

って各篇のもとに付録し、重要なものは一語半句についても批評解説をおとしていない。  
まことに詩学の指南書といつてよい……

『明史』卷一百八十六に見える伝によれば、張翥、字は用和、成化十一年（一四七三）の進士で、清廉剛直の官吏であったが学芸にも見識をもった人らしく、成化十一年（一四七三）の重刊はこの人の発意により、序はこの書の要をつくしている。文中の「筆は造化を補う」は李賀「高軒過」の語を採取したものだ。

前集卷八には孟浩然・盧玉川（全）・鄭谷・李長吉（賀）をおさめ、賀の作では「金銅仙人辭漢歌」「高軒過」「雁門太守」「將進酒」をかかげる。賀の詩二百五十首から代表作数篇を抜くとすれば、この四首の選抜はまず當を得たものといえる。解説として引く『新唐書』の伝、杜牧之（牧）・朱文公（熹）『珊瑚鈞詩話』（張表臣撰）・李義山（商隱）「李賀小伝」、陸龜蒙「李賀詩集序」へ実は「李賀小伝の後に書す」をはじめ各詩につけた評註もすべて他家の語だけれども、おおむね妥帖のものがえらばれている。

「高軒過」第七句「元精炯炯貫當中」、雁門太守」第六句「霜重角聲寒不起」の炯炯と角とはわたしの知る諸本には見ない文字である。宋末元初にそのような異本があったのか、刊誤であるのか、あるいは後に記すようなこの書の編時の著者の事情によるのであるのか。

『四庫全書總目提要』は蔡氏の序文などから、この書の序刊時は元の太祖の至元二十六年（一三六九）宋滅亡の後十年であることを考証し、謝枋得集の付録の贈行諸篇中に正孫の詩一首があり、それ

がこの編者の蔡氏だろうという。

至元二十六年は宋の遺臣の謝氏が征服王朝元に屈せずして死んだ年である。蔡氏は自序に「官僚志願者としての学習を棄て去り、ほしのままに諸家の詩を讀むことが出来るようになった」という。それならば、宋の臣ではなかった。けれども『提要』が挙げる作で蔡氏は謝氏の弟子と自称する。「詩林広記」の序に「山深く林密にして、既に書を蔵するの素なく、また書を借るの便なし」という。察するところ、亡国の遺民として、新朝の追究を山谷に避け、一片耿耿の志をこの書の編纂に注いだのであろうか。序にはまた「人口に膾炙するもの」を採ったという。賀の四首もそれには違いないが、また賀の「志」の最も隱微に突出したもの、張氏のいわゆる「諷諫」だといえなくはない。

『總目提要』の筆者の考証には、蔡氏への共感が及かに感ぜられる。その「志」をあらわに説かなかつたのは、かれもまた思うことを卒直に言い得ぬ條件の中に生きる人だったためであらうか。

余談ながら、わたしの『詩林広記』には「昭和癸卯十月三十日、開益」と記してある。癸卯は三十八年で、開益とはこの本を買った書店名である。

寺田三條に古くからあったが、いつも碩子戸をしめきり、陰気な店先で老人が和本唐本のつくろいをしていた。若い書生なんぞ寄せつけない身構えと感ぜられ、学生時代から何度も店先に佇んだが、戸を排して中にはいる決心がつきかねた。

昭和二十七年の三月の終りか四月の初め、その日は珍らしく戸があいていて、老婆が店番していた。わたしはそつとはいって、あちらこちらの棚をのぞいた。そうして『官板李長吉歌詩』三冊をみつけた。長らく尋ねて求め得なかった本である。いくらですかときくと、ちよつとお待ちやしてくれやす、といつて中に入り、老主人が出てきて眼鏡ごしにこちらの顔をじろりと見た。値段はわたしの月給の三分の一くらいだったろうか。当時の勤め先では給料の邊配がつづいていだから、もちろんそれだけの現金はもちあわせなかった。「珍らしい本やおへんけど、このごろは出んようになりました」主人はいった。ありのままを言っているの、売りつけようとするのではないことははつきりしていた。わたしは、とつておいてくれるように頼み、それから数日のちの四月四日にこの本をわたしの机にのせることができた。

それからちよいちよい寄った。付き合ってみると主人はあんがい気のいい人で、口数は少いが古書のことをぼつぼつ話してくれた。明版『袁中郎全集』、『趙松雪集』、『呉梅村詩注』などはここで手に入れたのだと思う。買うときはわたしの財布にとつて荷がかちすぎるように思えても、あとで古書目録をみると他の書巻よりすつと安かった。影印本がづぎづぎ出る時代になると、ああまで無理をしなくてもよかつたなどと思うけれども、あのころは見つけたとき買っておかぬと、いつ手に入るかわからなかつたのだ。

『詩林広記』を買った日は、店がすつかり改造され明るくなり、淨るりや長唄の本が店頭を占めていた。かわりましたな、という、「昔いもんがやかましくいので、しようことなしに今

様にしましたんや、こないしても、どっちみち本屋はわたしで仕舞いどすけどな」とぼやいた。わたしのほしいような本はなかったが、手ぶらで出るのも悪い気がして、端本を承知で『詩林広紀』を贈った。

それからまもなく、杏はカーテンを下しっきりになり、飾り窓にも本の姿を見なくなった。なお健在なのかどうか知らぬが、その老店主は、あのひいやりと薄暗い仕事場とともに仙去したよ  
うな気が、わたしにはするのである。  
(辛亥五月三日)

△雑記・22▽ 同 好

高橋和巳氏の逝去を、あくる日のきょう、新聞の夕刊で知った。

わたしは氏と交遊はなく、よそながら見るといふこともなかった。しかし氏の関心するところとわたしのそれとが交又したことがある。わたしは晉の詩人潘岳の小伝を書きつつあったとき、氏は「潘岳論」を発表した。わたしは唐の詩人李商隱を愛読し李賀論のなかで少し触れている間に、氏はその詩の注を一書に著した。新聞の記事によれば、商隱についての長い評論が氏の最後の仕事であったらしい。氏の小説は数篇を見たに過ぎないが、研究と雑文とは時々読み、その消息を本屋などから折々に聞いた。

「潘岳論」は、たぶんこの詩人について書かれたものとしてほもつとも包括的であろう。李商隱についての論もまた、その周到が推測される。

李賀について「中国古典詩のフォーカイズム——鈴木虎雄註釋『李長吉歌詩集』」なる一文が

ある。商隠に対するほどには露の詩を親切に読んでいないように感じた。限られた紙幅ではやむをえないことであり、鈴木注の紹介としては後かな文とすべきであろうか。

「フリタンの驢馬」を枕において、けっきょく『漢魏叢書』は買わなかった、という話を、本屋の広告雑誌が載せたことがある。筆者の名は明らかになん・ネームと知られた。同誌の執筆者は漢学の老大家ばかり、文章もことさらに古風なものが多い中で、この一文は際立った。本屋の主人に聞くと「高橋さんです。お苦いけれど筆の立つ方ですなあ」といった。なるほど、と思つたが、間もなく氏の名が文芸雑誌にしきりに現れた。

心があれば志、言葉に表現されれば文学、これはすべての文人が心に自負とともに秘めていてよい基本的な理である。そして、一見無色な、それ自体何の価値でもないような「持統」が各々の志を豊饒化し、開化させるための唯一の道なのである。

へ志ある文学

氏がしきりに「へ志」をいうことを氏の知人から聞き、また、氏が大学で専攻を中国文学に選んだ一つの理由は、そこを志望する学生が極めて少ないことであることと聞き、次のようなことを想像した。中国文学はいまの日本でははやらめ研究分野に属する。にもかかわらず、その研究を持続するために半大なエネルギーを必要とする。だからやりたがるものがあまりない。だから俺はそれをやる。小説を書きたいが書けないので、詩を書きたいが書けないので、研究するという研究者がないではない。書けば書けるがその能力の発揮を断念して或いは制限して、そのエネルギーと能力とを研究に当てる。それでこそ創造的な研究となるだろうから俺はそれをやる。ざつとこ

うした心の向いかたを、氏のへ志へにあてて考えたのだ。氏が創作に専念するため、大学を去った。と聞いたとき、勝手な想像を人の上に押しつけてひとりで感心していた己に苦笑した。とかし新聞などに新著の広告が出るたびに「持続」してゐるな、とひそかに声援を送った。ところで氏には「孤立無援の思想」というエッセエがあり同じ題のエッセエもある。

これも拒絶し、あれも拒絶し、そのあげくのはてに徒手空拳、孤立無援の自己自身が發るだけにせよ、私はその孤立無援の立場を固執する。

わたしには氏のいう孤立無援がよくわからなかった。氏は研究者としても、文学者としても、花々しく力強い声援を浴びながら舞台にのぼり、以来その声の衰えたことなどなぞさうに見える。だが、それは第三者の目の見る姿で、雑壇の中で寂寞の深いように、フラットライトの中で氏の最も感得するものが孤立無援の思想なのであつたかもしれぬ。

いつの世にも人は幸運であり続けることはできない以上、志を貫くことには、ある滑稽感のまつわることがある。へ志へある文学

その主観において孤立無援であることはうなずけても、滑稽を氏に感ずることはなかつた。滑稽感から最も遠いところを疾駆する走者と見えた。氏が教員として大学に歸り、いわゆる「紛争」の中で再び大学を去つた時にも、その勤勉と誠実とを説く人があれば、その言葉を耳にとめはしたが、氏がその論説の中で描いた競技の終つたあとのクラウンドを走りつづける人の愚直を氏の上で感ずることはできなかつた。なぜあの人は滑稽になれないのだろう。大学という、考え様

によつては古ぼけて滑稽無慚な世界で、いまどき教員という役割を振りあてられわすかの糧を得、辛うじて研究と名づける業を細々となむような道化は、滑稽を骨の髄までなめるほかに志を持続させる手はないはずだ。学生という名の青年たちに、すでに中年をこえ老年に近づいた男が、一人の人間として答えるには、おのれの中のカランドウをあっけらかんと見破られ、柄にもなく頼みからめ教壇で立往生する以外にはないか。わたしは自らの滑稽な姿を学生たちの眼中に見るたびに、やや激して自らにいった。

李商隱は今狐楚に才能を見出され、楚の死後、王茂元に庇護され、楊嗣復を訪い、また茂元のもとにかえる。当時の政界は、腐族派の李德裕、進士派の牛僧孺にひきいられる二大党派が相あつた。令狐と楊は牛党、王茂元は李党の人である。商隱はその才能によつて両派の人から愛され、相反する両党の恩顧をうけたために節操を疑われて窮した。

儒林と文苑とを李・牛の党にたぐえることは当らぬが、商隱を学んだ高橋氏が儒と文の二つを執つてこれを全うしようとする志は壯とするに足りた。だがあるいは、わたしたちの目の及ばぬところで、窮屈する思いもあつたかもしれぬ。李商隱の処世は同情するに堪えるけれども、王者を盗人と観じ官途を塵芥と見做す立場からすれば、その生涯は滑稽といふなくはない。孤立無援の思想を固執しながら、つねに縉紳、処士、老大師、青少年、ないし攝政、商賈にまで愛せられ喝采を浴び続けたことは、氏のへ志に反することではあるうが、反するがゆゑにそれは滑稽でなかつたとはいへぬ。けれども、滑稽もまた氏のへ志の一分だったのでないか。

氏は必ずしも身を処するに聰明なためだけで教壇を去ったのではなかつたのかもしれない。氏の病があついと聞かされたとき、わたしはかすかにそれをさとした。

昨夜わたしは『詩林広記』という宋末元初の詞華集について小文を草し、征服王朝のもので、編者蔡蒙齋が亡国の遺民としての志をこの書に託したのであるかと記した。筆をおいたのはけだし高橋氏の生命の終った時刻である。

蒙齋は山谷に身をひそめ、他人の詩を選び、他人の説によってこれに注するほかに、志をこめろすべを知らなかつたようである。高橋氏は儒官として国子に請じ、文士として世に大論小説を長べ、へ志す滑稽をさえおのれの有とした。氏の生涯を不幸といえは当らぬであろう。「学芸は長し」と古人もいった。肉体の死を悲しむことは無用である。

氏は「詩人の逸話」という文中に、同時代の詩人張華と潘岳とに相似た句を含む悼詩のあることを指摘する。いま張潘の各一句を取り、これを結んで、氏の壺を送ることばにかえる。

同好遊不存

壺壞永幽隔

(辛亥五月四日)

△雑記・23

狼 疾

雑記・2に史雲汀注李長吉詩について少し書いた。その雲汀について全祖望『鮚埼亭集』巻十二に「史雲汀藝版文」があり同じ巻の「郭芥子墓志銘」は藝版文を補う記事である。また外篇巻四十一に「答史雲汀論孔門人弟子帖子」巻四十三に「答史雲汀問十六回春秋書」に「答史雲汀問六陵遺事書」に「與史雲汀論行朝録書」がある。

墓版文によれば、雪汀、姓は史、名は榮、一名を闕文、字を漢桓といい、浙江の鄞の人。少年のころから作詩を好み、はじめ宋誼正徳に学んだが、明末夷陵派の故習を脱せぬその詩風の非をさとって、宋の黃庭堅山谷を学び、またその生法を嫌って、唐の盧仝玉川を学び、晩年には筆にまかせて作り、それを宋の楊萬里誠齋ぶりだと思ひこんでいたが、実は誠齋の学びそこないだった、という。小学・十七史・文選に熟讀していたが、傲慢変屈の人で、後には學問も捨てた。

雪汀が著すところ李長吉詩注ほとんど三尺許りなるあり。その最も自負するものも予は甚しくは許さざるなり。『風雅遺音』はもって毛詩の古韻を訂正し、すでに世に行わる。并びにその『竹東集』みな嘗て予の序を察め、予いまだこれに充ぜず。雪汀これをもつて愾る。

死んだときに七十九歳だったといひ、その銘文に「驚駭振うべからず、狼疾やぶすべからず云々」  
墓版文の前半はその狼疾の状を描き、「郭芥子墓志銘」もその約三分の一は雪汀の「卜狼」と祝辭しとを寫して生動する。

わたしは、はじめ全氏の二文を訳してここに載せるつもりであった。読み返すうちに気が重くなつて来た。全氏は「黄震・王允儀以後の一人」と称され學問淵博の宏儒である。墓版文に「三尺許り」といふところからすれば、雪汀の李長吉詩注は死時になお草稿のままだったのだろう。皆者の最も自負するものも宏儒が許さなかつたと知れば、人は手大な遺稿をほとんど反故と見做しはしなかつたか。反故をたれが上木しよう。友にも憎悪された人の文字をたれが保存しよう。悪人に背き、故人に顧りみられなくなった雪汀をしげしげ訪うたというから、全氏はかれにと

つての最も篤厚な友であった。その友情をもつてしてもかく記さざるを得ぬとすれば、雪汀の注はほとんど見るべきものがなかつたろうと推察される。ただ、李賀の詩には、大儒には聞えず真情を、狼疾狂悖の人に吐露するという趣きがないでもない。それを思えば、見て失望するであろう雪汀の注もなお、ひとたびはこの目で確かめたい気がする。わたしは己の裡なるそのような顛狂にいささかうんざりしているのだが。

全氏の墓版文には雪汀の卒時を記さぬ。「郭芥子墓志銘」に、乾隆癸酉すなわち十八年（一七五三）九月二十三日に死んだ郭氏の葬に、雪汀が杖に扶けられて臨み、棺を撫でて長慟した、という。全氏は乾隆二十年（一七五五）七月二日に五十一歳で死に、その正月にはすでに病床にあつたらしいから、雪汀の死は兩年の間であろうか。それならば、康熙十五年（一六七〇）に生れ乾隆十九年（一七五四）に死んだことになり、これが当らめとしても一年を前後するのみである。  
（辛亥六月一日・十八日）

△雑記・24 V 記 遍

雑記・16に「昔の隠者にも葵祭の行列を見物した兼好がいて」と書いた。家人が、あれは競べ馬ではありませんでしたか、というので「徒然草」を読みかえしたら、なるほど五月五日のそれだった。わたしの記憶のあてにならない例をここにも一つ見出した。つい近ごろまでわたしはトーマス・マンの「フッデンフロークの一家」を読んでいないと思ひこんでいたが、若いころの日記をみると、ちゃんと読んでいて、あちらこちらを引いている。

川喜田二郎『続・発想法』にこんな話がついている。へ私がヒマラヤで二度目の学術調査をや

ったとき……往きに通ったところを数カ月後に、また通った。……同行の隊員たちは往きの経験についておたがいに話しあってしたが、たがいの話がしばしば食い違ったのである。その結果、私は、各人が往きに記録した自分のノートを、各自にテントのなかで読みかえすことをすすめた。隊員たちが驚いたことは、自分が「往きにはこうであった」と現在思いこんでいたことと、往きに自分がその場でノートに記したことは、しばしば食い違っていたことである。ところが隊員たちは「現在の思いこみのほうが正しくて、往きの記録はなにかの思い違いで、まちがって記録をしたに違いない、訂正をしておこう」というつよい誘惑にかられたのである。あてにならない記憶者はわたしだけではなかった。

『文選』に江文通の雜擬詩があり、その休上人に擬する詩に「日暮碧雲合、佳人殊未來」の句があり、これが休上人の作でないことはいうまでもない。ところが白居易の詩に「不似休上人、空多碧雲思」などの句があつて、兼天は碧雲合の句を休上人すなわち湯惠休の詩と思いこんでいたことがわかる、と<sup>〔三〕</sup>吳曾『能改齋漫錄』に記す。同書にはほかにも記憶ちがいや間違つた思いこみの例がたくさん挙げてあり、著者その人もところどころで同じあやまちを犯している。

<sup>〔四〕</sup>方勺『泊宅編』(説郛所收)を見ていたら「韓退之に悲詩多し、三百六十言に哭泣する者三十首」といひ、<sup>〔五〕</sup>胡震亨『唐詩話叢』にも同じ語がみえる。わたしもそのことに気づき先年拙著『韓愈』の二一六頁「涕泣」の注に例をあげておいたが、韓氏は泣かなかつたという方向に力をこめる説もある。「石鼎聯句」の序に「長頸而高結喉中有作楚語」という句があり、その高結を

わたしは小林太市郎『漢唐古俗と明器土偶』を読んだ記憶によって「高髻と同じ」と解釈した。さきの『能改斎漫録』をはじめ、『<sup>〔主〕</sup>曾季狸『艇齋詩話』』『<sup>〔元〕</sup>韋居安『梅磭詩話』』『<sup>〔明〕</sup>楊慎『升庵詩話』』王夫之『薑齋詩話』などみな高結即高髻とみることを知ったが、いま、高結喉と句読する説もある。これらはみな、あるいはわたしの方があやまっているのかもしれぬ。

雑記・16にかえろう。あの文を書き改めるという手もある。だがわたしはそうしたくない。その理由は二つ。第一、書き改めるとあの短い文章の中に「馬」が多くなりすぎる。李賀に「馬詩」があり、せまい紙幅に二十三頭の馬を自在に走らせている。あれは名人の芸で、わたしはまねをすれば、馬が犬に変じかねない。第二、おのれの記憶のあてにならなさを自分の方法にくりいれたい。

一は冗談だが、二は本気である。わたしとて過誤を喜ぶわけではない。「独学固陋」ということばがある。わたしはほとんど独学者で、わたしの業にはつねに固陋がつきまとう。固陋をのがれるために幾度か独学を捨てようとしたが、集団に近づけば忽ちもろもろの煩濁が頻集した。それしきの煩濁に堪えずに一流の大家となることはできぬと忠告してくれる人もあったが、わたしは高襟に威儀を正すよりも、草屋に安坐することを好む。三流四流ないし十萬六千八百三十一流あるいは流外無流であっても別にどうということはない。だが固陋をどうするか。発表しなければよい。これもまたわたしは試みた。だが発表せぬことの中にはゆるま湯につかっているような麻痺性があった。おのれの怠情を高尙とする危険がある。発表することによって気づく過誤にいつ

までも気づかぬおそれがある。過誤や固陋をおそれておのれの業を秘匿するよりも、日々におのれの歩みを記し、過誤と固陋に気づけば日々これを訂正してゆけばよいではないか。一流の人にとって過誤にも初等高級の差があるらしいが流外独学のわたしにとって過誤はすべて過誤である。過誤を竿にかけて風日にさらすことは、ふんどしをなびかせた隠士の風流には及ばぬけれども、あの隠士は貴族。平民のわたしは、春にわたいれから綿をはがして夏も着るのである。路傍のわたしの過誤を見て教えを吝まぬ寛厚の長者・高士があれば、わたしは再拜してこれを謹しみうける。その人もまた独学の人ならば、庵ならん冬冬山里、どうたいたくなるうが、わたしの固陋は、やっぱり孤独の會里に困学するのが似つかわしいようである。(辛亥六月十九日)

▲雑記・25V 過去のことに

きのうの朝日新聞の夕刊に「パリ十八日」紫田特派員の記事がある。第百十七回のベトナム和平パリ会談は十七日パリの国際会議センターで行われ……ニューヨーク・タイムズ紙がベトナム介入に関する米政府の機密文書を公表し、政府が記事をさし止めた事件について……討議の中でケエン・チ・ビン南ベトナム臨時革命政府代表は……「これはアメリカ政府のベトナム戦争についての救々のウソを暴露したものだ」と非難した。ブルース米代表は「過去のことをむし返しても何も生まない。そのような議論には加わりたくない」と答えただけだった。過去のことに關する米代表のことは、或る種の人々の并疏の典型である。このことをわたしは拙稿「李神通」の注としてここに保存する。

(辛亥六月十九日)

『内閣文庫漢籍分類目録』にのせる李賀の集は、官板・王注（清乾隆版）・徐渭等批註（明版・黄評（民国石印））などで、みなわたしの知っているものだが、次の一本は未見である。

李長吉詩集四卷外集一卷 明黄光校 明天啓元版

明の黄光なる人の校した賀の集は、わたしの記憶するかぎりでは他の書目などで見ない。ところで拙稿「和刻 李長吉詩集」の注（本号10ページ）でふれたわたしのもっている写本『李長吉詩集』の序文の撰者は「江夏黄光」であった。天啓は一六二一—一六二七年で、わが後水尾天皇の元和七年から寛永四年まで、将軍は徳川秀忠・家光である。江夏黄光はたぶん天啓の黄光であり、わたしの写本は天啓の板本の写しなのであろう。江夏は湖北省武昌県である。黄光については今のわたしはこれ以外のなにも知らぬ。

（辛亥六月二十九日）

△雑記・27▽ 永田調兵衛・補遺

永田調兵衛と丁字屋とは別の本屋であり、本屋仲間という以外にかわりはない、とのこと。初代長兵衛のころ、茶屋と本屋の営業は、武士・僧侶にのみ許された由。 （六月二十九日）

△雑記・28▽ 呉 鈞

寺賀の「南園十三首」の第五首は「男子何不帶横刀 收取關山五十州 請君暫上凌煙閣 若箇書生萬戶侯」*zogen (shikōka)* 第一句の「横刀」を末蜀本などが「具鈞」とし、それがよいだろう。この詩を荒井注は「男児たるもの、三日月形の刀をさげ、北部の国境地帯の五十の州を朝廷のた

めに回復せずにはおくものか。どうか建国の功臣が捕かれるあの凌煙（問）にちょっと上ってごらん下さい。いかなる文学青年が、大名に出せられたかれらのなかにいるというのです。と訳し、斎藤注もほぼ同じで、ともに王注によるものようである。この作はもつと痛烈な諷刺を含むようだ。

『吳越春秋』巻四に、吳王闔閭が百金の賞を懸けて鉤（三日月型の刀）を募集すると、ある男が金ほしさに自分の二人の子を殺し、その血で鉤二を鍛て献上したという話があり、その名鉤（？）が呉鉤だといわれる。（曾注はこの話をとらえている。）そこでこの詩は次のような意になろうか。英雄になろうというほどの男子なら手段をえらばぬ。子を殺して鍛た呉鉤を身につけて關山五十州をとるがいい。まあ凌煙（問）に上って見たま文。そこにならんだ。功臣はみなさういう手合いばかりさ。本を読んで、真・善・美などに感激してゐるような書生、ほは大大名になれっこなし。功臣はさしみのつまで、めあては功臣を描かせた唐の太宗である。拙稿「李神通」は、この解を支持するだろう。

（辛亥六月二十九日）

### 正 誤

第三号 四一頁 9行 北齋 北齋と訂正。

第四号 八頁 4行 担家 権家と訂正。一三頁 5行 神道 神通と訂正。9行 風雲となり、  
風雲となり、と訂正へしをとる。10行 三万の二 三分の二と訂正。一六頁 15行 殘棠、  
殘棠と訂正。一七頁 3行 封葬 封徳葬と訂正。二三頁 17行 楚台 楚辭と訂正。二八頁

11行 終りへ終へ 終りへ終りへと訂正。三〇頁 5行 おひただしや おびただしやと訂正。  
 三一頁 15 絶望だ 絶望は、稀有だと訂正。三八頁 3行 た 不要。5行 老店主の上二字  
 分け消し。6行 するのである するのであると訂正。四二頁 14 鮎崎亭集 鮎崎亭集と訂  
 正。16行 卷四十一に、 卷四十一にと訂正。四四頁 一家を 一家しをと訂正。四五頁 7  
 行 などと などとと訂正。

見 贈

井口浩氏『栢』3。和田利男氏『一休と杜詩』。岸田典子氏『あしかび』創刊号。寺田透氏『和  
 泉式部』鈴木凉氏『海』36。須永朝彦氏『鉄幹と品子』。小高根二郎氏『詩人 伊東静雄』『栗  
 樹園』193。荒井健氏『凶畫』191・6。

後 記

本号をもって、桃栗忌・青苔忌を記念する。  
 三月に用紙などの材料代が値上りした。心苦しいが、次の第五号から頒価を二〇〇円にさせてい  
 ただきたい。  
 近く『方向』第十四号を発行の予定である。これもご購読わがえると幸いです。販価未定。